

民法Ⅲ定期試験問題（2021年度）

2022年1月26日

松岡 久和

【問題1】

次の5つの文章は正しいか。まず、正誤を○×で示しなさい。見解が対立する場合には、判例の趣旨にそって判定しなさい。次に、正しい場合には、その根拠を説明しなさい。誤っている場合には、その箇所を指摘して、誤っている理由を説明しなさい。なお、当事者の記号は、たんに説明の便宜のために付けたものである（各8点。合計40点）。

- 1 保証人と物上保証人の間には、人的な無限責任債務を負うか物的な有限責任のみを負うかの違いがある。債務者から委託されて債務や責任を負担した場合、債務者に対する求償においては両者は等しく扱われる。
- 2 債務者が第三者に対して抵当権を設定した土地を時価の半額でその第三者に譲渡して移転登記もされた場合、債権者は、その譲渡を詐害行為として取り消すことができる。
- 3 Yに対する債権の担保としてYから譲渡を受けて譲渡担保を登記原因とする移転登記を得た土地甲を、Aが、被担保債権の債務不履行後に、Xに時価相当額で譲渡してXが移転登記を備えた（ここまでは前提であって正誤の判定の対象外）。この場合において、Xは、AY間の譲渡が譲渡担保であることを知っていたとしても、甲の所有権に基づいてYに明渡しを請求することができる。ただし、Yは、Aが清算金を支払うまでは、明渡請求を拒絶することができる。
- 4 期間の定めのない賃貸借契約について、その賃借人の債務を保証する保証契約は、書面によって締結され、そこに極度額の定めがあれば、保証期間の限定がなくても有効に成立する。
- 5 Xは、Aに対する1000万円の α 債権を保全するため、その弁済期後に、Aの唯一の財産であるAのYに対する800万円の β 債権を代位して、Yに対して直接800万円の支払を請求することができる。Yは、Xから支払請求訴訟を提起された後は、Aに対して800万円を弁済しても、Xの請求を拒むことができない。

【問題 2】

次の事例について下記の（問 1）から（問 5）に答えなさい。（問 1）から（問 3）は相互に独立した問題である。（問 4）および（問 5）は、（問 2）からの派生問である。

1 XはAに対して5000万円の貸金債権を有していた。Aがその唯一の財産である甲建物（時価8000万円）をYに対して譲渡し、Yが移転登記を備えた。

（問 1） AのYに対する甲の譲渡が贈与契約によるものであった場合、XはYに対してどういう要件がみたされたときに何を請求できるのか説明しなさい（10点）。

（問 2） AのYに対する甲の譲渡が7600万円での売買契約によるものであり、YがAに支払った代金7600万円がどう使われたのか、今もAの下にあるかわからない場合、XがYから甲を取り戻すためには、どういう要件がみたされる必要があるのかを説明しなさい（10点）。

（問 3） AのYに対する甲の譲渡がYに対する5000万円のAの債務の代物弁済によるものであった場合、XがYに対して、どういう要件がみたされたときに何を請求できるのかを説明しなさい（20点）。

2 上述1の譲渡が（問 2）のとおり売買契約によるものであった場合において、Yが、さらに、この事情を良く知っているYの妹のZに甲を6000万円で転売し、Zが移転登記を備えた。

（問 4） XがZから甲を取り戻すためには、どういう要件がみたされる必要があるかを説明しなさい（10点）。

（問 5） （問 4）の訴訟においてZが甲をXにより取り戻された場合、Zはだれにどういう請求ができるかを説明しなさい（10点）。